

# 向中野幅遺跡

MUKAINAKANOHABA SITE

—第1・2次調査（仮称）盛岡学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書—

2019. 2

盛岡市教育委員会

## 例言

- 1 本書は、岩手県盛岡市向中野字幅、字畑返地内に所在する向中野幅遺跡における、盛岡市教育委員会(学務教職員課)による「(仮称)盛岡学校給食センター」建設に伴う、盛岡市教育委員会(歴史文化課遺跡の学び館)が実施した同遺跡第1・2次発掘調査の報告書である。
- 2 第1次調査は、試掘調査として平成29(2017)年4月19～28日に実施した。その結果、遺構遺物を確認したことから、本発掘調査として第2次調査を同年11月1～30日に実施した。
- 3 発掘調査は盛岡市教育委員会歴史文化課遺跡の学び館の文化財主査 神原雄一郎、同 佐々木亮二、文化財調査員 今松佑太が担当した。本書の執筆編集は、平成30(2018)年度に今松佑太が担当し、同文化財主査 今野公顕が補佐した。
- 4 遺構平面位置は、周辺遺跡調査事例と整合性を図るため、世界測地系を日本測地系に変換し、平面直角座標X系を用いた調査座標で表示した。  
・調査座標原点 X=36,500 Y=27,000 (日本測地系)  
= RX±0 RY±0 (調査座標値)
- 5 高さは標高値をそのまま使用した。
- 6 土層断面図は堆積の仕方を重視し、線の太さを使い分けた。層相観察には「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
- 7 本書で用いる遺構記号は次のとおりとした。  
・溝跡 RG
- 8 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館にて保管している。
- 9 本書作成にあたり多大なる御助力を頂いた。記して感謝申し上げる。  
もりおか歴史文化館、太田地区活動センター
- 10 第1図は国土地理院長の承認を得て同院発行の五万分の一の地形図を複製した盛岡市管内図(承認番号 平17.東複第215号)を利用した。第2図は、岩手県の承認を得て岩手県所有の盛岡広域都市計画図(1/2500, 1/10000)を複製したものを使用した。(承認番号 平成29年8月21日岩手県指令都第8-5号)
- 11 当該調査成果報告は、既報告のものより本書の内容が優先する。

## 目次

- |            |   |             |   |
|------------|---|-------------|---|
| I 遺跡の立地と概要 | 1 | III 道明堤について | 8 |
| II 調査成果    | 2 | 報告書抄録       |   |

遺跡名	略号	次数	年度	調査方法	所在地	面積 (㎡) (調査対象)	調査期間	遺構・遺物	調査原因	調査	報告書		
向中野幅	OMH	1	H29	試掘確認	岩手県盛岡市向中野字幅返	819.0 (11.078)	2017.4.19～ 2017.4.28	縄文時代 近代以降	遺物包含層 溝跡	(仮称)盛岡学校給食センター建設	盛岡市教育委員会	本書	
		2	H29	本調査		743.8 (11.078)	2017.11.1～ 2017.11.30	縄文時代 近世以降	土器、石器 陶磁器片				
		3	H29	試掘確認		2,568.0 (24.848)	2017.11.21～ 2017.12.6	縄文時代 平安時代以降	土坑3 平安時代以降溝跡19、土坑3				盛岡市新産業拠点形成推進用地整備事業
		4	H30	本調査		10,843.5 (14.545)	2018.7.9～ 2018.9.28	平安時代 近世以降	土器 陶磁器片、木製品				

第1表 向中野幅遺跡 発掘調査実績一覧



第1図 遺跡位置図 (S=1:100,000)

## I 遺跡の立地と概要

向中野幅遺跡は、岩手県盛岡市向中野字幅及び字畑返地内に所在する（第1図）。周辺は田畑の広がる平野に集落が散在する地域であった。

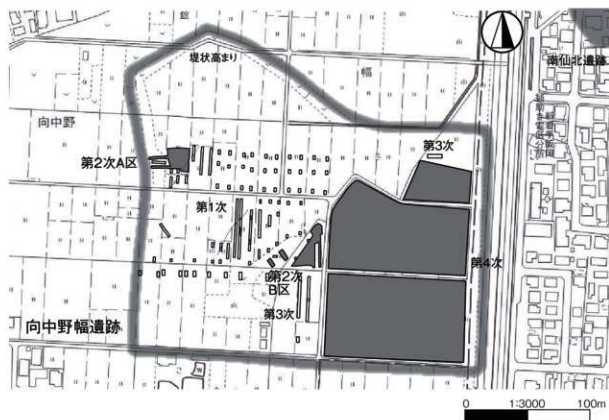
本遺跡は、大規模土地両面整理事業が行われた「盛岡南新都市開発整備（盛南開発）区域」、及びそれに連続して施工されている「道明地区土地両面整理事業区域」の南東に位置する。東北本線仙北町駅から南方約1.8kmに位置し、遺跡の東部はJR東北新幹線と東北本線に隣接する。遺跡の標高は約119.5～120.8m、遺跡の総面積は約57,300㎡と想定される（第2図）。

本遺跡は、北上川の西岸に発達した雫石川の流路変換によって形成された沖積段丘に立地する。周辺の沖積段丘の微高地には、古代から中近世、近現代までの集落遺跡が多く分布し、各遺跡は細かい旧河道によって画されている。

縄文時代～古墳時代の遺構遺物の発見は少ない。遺跡の多くは7世紀中葉以降の古代の集落遺跡で

あり、中近世の居館跡、集落跡、墓城なども見られる。奈良時代の8世紀中葉以降、堅穴建物を中心とした集落遺跡が増加する。この時期、律令政府は東北地方に住んだ統治範囲外の人々を「蝦夷（エミシ）」と呼び、延暦22（803）年に坂上田村麻呂に城柵・志波城（下太田方八丁ほか）を造営させ統治拠点とした。中世～戦国期には、台太郎遺跡などにおいて堀を巡らす居館が営まれ、在地領主の居館が点在したと考えられる。近世には、南部氏が盛岡城を築城し統治した。本地域東側には奥州道中（街道）が整備され、本地域は農地が集落が点在する農村地帯となる。各遺跡からは曲屋などの掘立柱建物跡や井戸跡などが確認され、この姿は盛南開発事業が施工される前の本地域の様子と大きく変わらなかったと考えられる。

本遺跡は、奈良・平安時代の集落跡や、「道明堤」と呼ばれた近世の鳥溜や水利施設の場所として知られていた。（今野公顕）



第2図 向中野幅遺跡 全体図 (S=1:3000)

## II 調査成果

### 1 調査経過

本遺跡の北西側は、大規模土地区画整理事業である「盛岡南新都市開発整備（盛南開発）」、「道明地区土地区画整理事業」が施工され、それに伴う多数の遺跡の発掘調査が行われてきた（盛南地区遺跡群）。本遺跡周辺は水田が広がる農地を主体とするが、盛岡市による新産業等用地整備事業及び（仮称）盛岡学校給食センター建設用地として開発されることになった。この計画地内に、古代の集落遺跡や江戸時代の水利施設「道明堤」跡と考えられてきた周知の埋蔵文化財包蔵地である本遺跡が所在することから、文化財保護法に基づき、盛岡市教育委員会遺跡の学び館が遺構確認の試掘調査を実施し、遺構が確認された範囲の本調査を行うことになった。

学校給食センター用地は、平成29（2017）年4月19～28日に試掘調査（第1次調査）を実施し、一部に縄文時代の土器や近世以降の溝跡などを確認したことから、同年11月1～30日に第2次調査として発掘調査を実施した（第2図）。

第2次調査の結果、江戸時代の「道明堤」の一部と考えられていた堤状の高まりは、近代以降の盛土が大部分を占めていることを確認した。併せて、重複する河道跡を検出した。これは豊富な湧水を伴い植物遺存体が堆積する層を形成しており、それに取り残された微高地から縄文時代の土器や石器が出土した。

### 2 調査区の地形

第2次調査において本調査の対象とした範囲は、北側をA区、南側をB区とした。（第2図）

A区は、本遺跡北西部に位置する。微高地となっている遺物包含層の検出地から西側には、現在に至るまで農耕が行われていた黒ボク土層（I層）があり、その下層に酸化鉄を多く含み、グライ化の進んだ灰褐色粘土層（II層）が堆積する。さらにその下層には砂礫層（III層）が堆積している。これを基本堆積層序とした（第4図）。灰褐色粘

土層（II層）と砂礫層（III層）の間には礫を含まない砂層があるため、大規模な洪水、氾濫によって一度に砂礫層と粘土層が堆積したものと考えられる。東側は、豊富な湧水を伴い、植物遺存体が多く残存する低湿地になっている。

B区は本遺跡の中央に位置する。河道によって周辺が削られ、取り残された自然地形である。シルト質の土が厚く堆積している。

### 3 遺構

#### (1) 遺物包含層（第3図）

検出位置はA区北東部である。旧河道沿いの微高地上に堆積している。現表土（水田耕作土）の黒色土下に、グライ化した灰褐色粘土層（II層）が堆積している。このII層中位から横位の状態で縄文土器が出土した。土器の大半は後世の耕作により削られており、II層は更に厚く堆積していた可能性が考えられる。

#### (2) RG 001 溝跡（第3図）

B区の北東から南西にかけて、現地形に並行して延びる。埋土検出面から18世紀後半から19世紀代の肥前染付碗や、同時期と考えられる陶器碗の小破片、焼締陶器の徳利破片が出土した。

#### (3) 堤状の高まり（第3図）

本遺跡の北西部から大きく北側に張り出し、北東部にかけて延びる堤状の高まりである。A区に2か所のトレンチを設定し、土層堆積状況を確認した。

堤状の高まりは、大きく3層に分けられた。

A層は、近現代の盛土層である。2層に細分され、いずれも黒色土を主体とする。プラスチック片やビニール素材の廃棄物が混入している。

B層は、近代以降の盛土層である。8層に細分され、概ね暗褐色土から黒褐色土である。酸化鉄を含む層が多く、B層の構築後に水を被った可能性がある。なおB層からは、近代以降のものと考え

えられる陶磁器片やガラス破片などが出土した。

Ⅱ層は、灰褐色粘土層である。微高地全体に広く堆積し、遺物包含層において、縄文時代の遺物が出土した層である。

#### 4 出土遺物（第5図）

A区RX-173・RY+60付近の遺物包含層から、縄文時代の土器と石器（石器、剥片）が出土した。

##### （1）土器

1は、深鉢である。底部は平底であり、体部へかけて粘土を輪積みではなく折り曲げて整形している。底部から頸部にかけてゆるやかに外傾しながら立ちあがる。頸部からは緩やかに内湾する。器外面に全面ではないが横位、縦位の撫糸文を施文している。また、頸部～口縁部にかけての内湾する箇所縦位の隆帯とその両脇に刺突列が施される。胎土には、多量の繊維と石英、長石を含む。微量の海綿骨針も含まれており、胎土は沿岸由来の可能性も考えられる。焼成はあまり良くない。

##### （2）石器

2は、石器である。つまみ部を持つ横型で、つまみ部及び背面全周縁に剥離調整を施す。熱を受けたハジケが認められる。3は、剥片である。

2と3の石材は、共に頁岩である。出土状況から、土器と同時期のものと考えられる。

#### 5 調査の総括

第2次調査で確認された遺構等は、縄文時代の遺物包含層、近世以降の溝跡1条、近代以降の堤状の高まりである。

遺物包含層は、旧河道沿いの微高地上に堆積し、A区北東部の東西約8m、南北約6.5mの範囲に広がる。遺物包含層からは、胎土に繊維を含んだ土器が出土した。この土器は、体部に撫糸文を施し、口縁部付近で内湾、縦位の隆帯に沿って刺突列を施す特徴を持つ。宮城県今熊野遺跡（村田・小川

1986）出土の大木2a式の資料の中に、これらの特徴との類似点を見出すこともできることから、今次調査で得られた土器も、大木2a式に併行する可能性が指摘できる。

RG001溝跡は、現地形に並行する形で延びており、埋土検出面で18世紀後半から19世紀代の陶磁器片が出土している。このことから、この溝跡は江戸時代後期以降の水路跡と考えられる。

また、これまで江戸時代の「道明堤」跡と考えられていた堤状の高まりを調査した。現在、地表面で確認できる堤は、混入する廃棄物や出土した陶磁器片の時期から、主要部分は近代以降に構築されたものと考えられる。

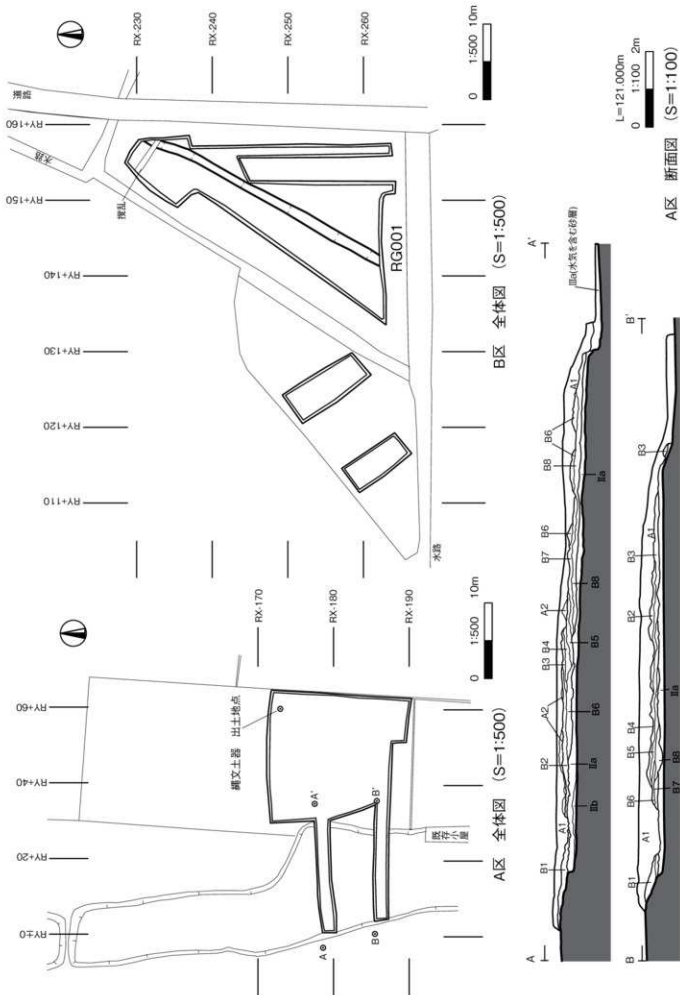
今回の調査では、平安時代の集落跡に関する遺構・遺物は確認できなかった。

向中野幅遺跡はこれまで調査事例が無く、今回の調査が初めてであった。その結果、遺物包含層から、縄文時代前期前葉の可能性のある土器資料を得ることができた。本出土土器の時期決定については、盛岡市内の類例が少ないことから、今後さらに調査や検討を継続していく必要がある。残念ながら、土器に伴う堅穴建物跡などの明確な住居地を示す遺構は確認できなかった。しかし、盛南地区における縄文時代の遺構・遺物のありかたを考察する上で貴重な資料であることは間違いない。また、今回確認できなかった江戸時代の「道明堤」跡についても、さらなる事例の増加を待ち、検討を重ねる必要がある。

（今松佑太）

#### <引用・参考文献>

- 村田晃一ほか 1986『今熊野遺跡Ⅱ縄文・弥生時代編』宮城県文化財調査報告書第114集 宮城県教育委員会  
小林達雄 編 2008『総覧 縄文土器』同刊行委員会



第3図 第2次調査 A区・B区 平面図・断面図

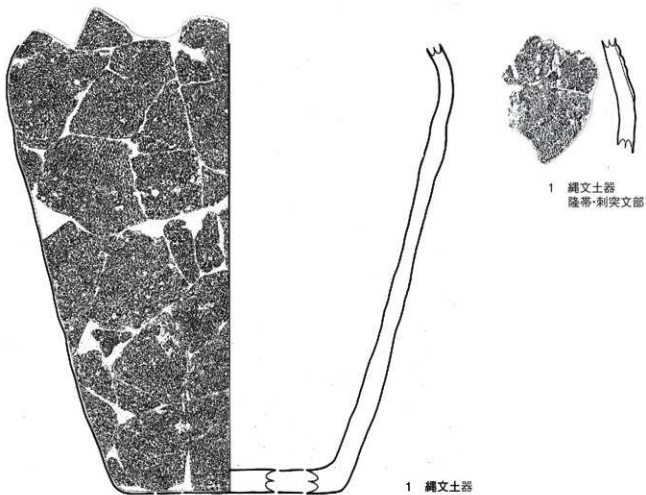
断面	層名	主要土			含有土			密度	軟硬	粘性	その他	
		土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)	状態	%					
A	盛土層	A1	SiCl	10YR2/2	SiC	10YR4/4	粒~塊状	1~3	中	中	中~強	酸化鉄点在
		A2	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR3/2	粉~粒状	3~5	中	中	中	
	堤	B1	SiCl	10YR2/3	SiC	10YR3/4	粉~粒状	10	中	中	中	
		B2	SiCl	10YR3/4	SiCl	10YR2/2	粉~粒状	5	中	中~硬	中	
					SiCl	10YR4/4	粉~粒状	5	中	中~硬	中	
		B3	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉~粒状	3~5	中~密	中	中	
					SiCl	10YR2/3	粉~粒状	7~10	中~密	中	中	
		B4	SiCl	10YR2/2	SiC	10YR4/4	粉~塊状	3~5	中	中	中~強	ブロック状
					SiCl	10YR2/3	粒~塊状	5~7	中	中~硬	中	
		B5	SiCl	10YR2/2	SiC	10YR4/4	粒~塊状	10	中	中	中~強	ブロック状, 酸化鉄点在
SiCl	10YR2/2				粉~粒状	5	中	中~硬	中			
B6	SiCl	10YR3/1	SiC	10YR4/4	粉~塊状	7~10	中	中	中~強	ブロック状		
			SiCl	10YR2/2	粉~粒状	2~3	中	中	中~強	酸化鉄僅かに含む		
B7	SiC	10YR4/4	SiC	10YR3/2	粉~粒状	7	中	中	中~強			
			SiCl	10YR2/3	粉~粒状	3~5	中	中~硬	中	酸化鉄含む		
B8	SiCl	10YR2/1	SiC	10YR3/2	粉~粒状	1~3	中	中	中~強			
			SiC	10YR3/2	粉~粒状	1~3	中	中	中~強			
遺物 包含層	II a	HC	10YR5/1	SiC	10YR4/3	粉状	5~7	中	軟~中	中~強	酸化鉄含む	
				HC	10YR5/6	粉状	7~10	中~密	中~硬	中~強	粘土	
II b	HC	10YR5/1	SiC	10YR4/4	塊状	1~2	中	中	中	酸化鉄僅かに含む		

断面	層名	主要土			含有土			密度	軟硬	粘性	その他	
		土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)	状態	%					
B	盛土層	A1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/2	粉~粒状	3~5	中	中	中	酸化鉄含む
					SiCl	10YR3/4	粉~粒状	1~3	中	中	中	
	堤	B1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR2/3	粉~粒状	5~7	中	中	中	
					SiCl	10YR2/2	粉~粒状	3	中	中	中	
		B2	SiCl	10YR2/3	SiC	10YR4/3	塊	10~15	中	中	中~強	粘土ブロック
					SiCl	7.5YR2/3	粒~塊	5~7	中	中	中	
		B3	SiCl	10YR2/3	SiC	10YR4/2	塊	3	中	中	中~強	
					SiCl	10YR2/2	粉~粒状	3~5	中	中~硬	中	酸化鉄含む
		B4	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR2/1	粉~粒状	5~7	中	中~硬	中	酸化鉄含む
					SiC	10YR3/2	塊	3	中	中	中~強	
B5	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR2/3	粉~粒状	3~5	中	中	中	酸化鉄含む		
			SiC	10YR5/3	塊	1~3	中	中	中~強			
B6	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/2	粉~粒状	3~5	中	中	中	酸化鉄僅かに含む		
			SiC	10YR5/3	塊	1~2	中	中	中~強			
B7	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR2/3	粉~粒状	3	中	中	中	酸化鉄僅かに含む		
			SiC	10YR2/3	粒~塊	5~7	硬~中	中	中	酸化鉄多量に含む		
B8	SiCl	10YR2/2	SiC	10YR5/3	塊	10	中	中	中~強			
			SiCl	10YR2/2	粉~粒状	10~15	中~密	中	中	酸化鉄僅かに含む		
遺物 包含層	II a	HC	10YR5/1	SiCl	10YR2/2	粉~粒状	10~15	中~密	中	中	酸化鉄僅かに含む	
				HC	10YR5/3	粉状	1~3	中	中	中~強	粘土	

第2表 A区トレンチ 土層観察



第4図 第2次調査 A区 土層断面模式図



出土遺物(土器・石器) 実測図



土器写真

第5図 出土遺物(土器・石器) 実測図・写真





2次調査 A区全景（北東から）



2次調査 B区全景（北から）



2次調査 A区 A-A'断面（南西から）



2次調査 A区 B-B'断面（南西から）



1次調査 A区 土器出土状況



2次調査 A区 石器出土状況



1次調査 B区 RG001 溝跡検出状況（南から）



RG001 溝跡 検出面出土遺物

### III 道明堤について

今次調査A区の北から西にかけて、「へ」の字状に延びる堤状の高まり（土手）を確認できる。現在、周囲は水田となっており、この高まりは畑として使われている。

地元の古老の話では、この場所は江戸時代の「道明堤」のあった場所であり、水田水利施設であるとともに、鳥溜りとして狩りの場所であったという。あわせて、昭和30年代の圃場整備前までは、冷たい湧水が湧き水田稲作にとって不都合があるため、あちこちに小さなため池や水路が作られていたと聞いた。

今回の調査で、この堤状の高まりにトレンチを設定し、堆積土の断面を観察した結果、盛土の大半は近代以降のものであることを確認した。

この道明堤について、文献および古絵図等を確認したところ、この場所が明確に道明堤と言われた場所である確証は得られなかったが、多少の知見を得られたため、以下に報告する。

#### (1) 古絵図（第7図）

もりおか歴史文化館に所蔵されている南部氏による近世の絵図を確認したところ、現在の向中野幅遺跡の位置、現在の堤状の高まりの場所と思われる場所に、堤（ため池、沼）の表現は見つけられなかった。しかし、『向中野通絵図面』の道明地内に、堤（ため池）と水路の表現を見ることができる。また、『増補行程記』の三本柳の場所には、「かつて大沼という堤があったが開田された」との趣旨の記載があるが、向中野にはそのような記載は見つけられない。

#### (2) 写真

国土地理院のウェブサイト上で公開されている昭和23（1948）年の米軍による空中写真や、その後の昭和37（1962）年の空中写真には、現在よりも長く、「コ」の字を左に90度回したような堤状の高まりを水田の中に確認できる。このことから、昭和30年代以降の圃場整備によって、堤状の高まりの一部が削平されたことが読み取れる。

#### (3) 文献

太田村誌『朝敵に額づく・太田村誌』によれば、蟹沢家の天保11（1840）年の萬覚書帳「定目飯岡通御官所諸控」に、飯岡通の供出する諸普請について記載があり、「一、向中野通 道明堤、小鷹堤、新堤、細工堤、湯坪堤、間渡堤、油田堤、メセケ所」とある。このことから、盛岡五代官割合のほか、飯岡通代官所管内が管理する堤のひとつに道明堤があげられていたことがわかる。

また、近世盛岡藩の文献基礎資料に「盛岡藩家老席日誌『雑書』」がある。現在44巻まで翻刻刊行されている。これまで1～10巻（正保元年（1644）年～正徳5（1715）年）及び25～44巻（宝暦11（1761）年～文政10（1827）年）まで、向中野通、堤、堤普請などの記述を探し、文献①～④の内容を確認できた。文献①～④以外にも、鷹野の場所として、しばしば向中野が散見する。

以上から、江戸時代の向中野道明地区には、水利施設であり、盛岡藩が幕府へ鳥を献上する鳥討ちのための鳥溜りとして利用された道明堤があったことは間違いない。

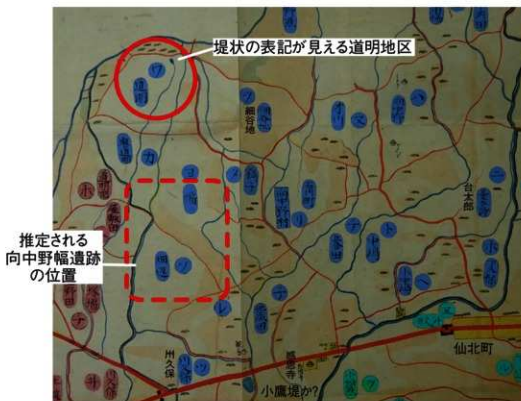
このように、今次調査区の土手状の地形が、近世江戸時代の道明堤の一部であるという確証は得ることはできなかった。

今後、道明堤及び堤状の高まりの地形についての文献記録や絵図等の調査を進めたい。

（今野公顕）

#### <参考文献>

- ・盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館編『盛岡藩雑書』各巻
- ・太田村誌編纂委員編1935『朝敵に額づく・太田村誌』太田村
- ・福田武雄編著1974『農民生活変遷中心の滝沢村誌』滝沢村
- ・『向中野通絵図面』近世 もりおか歴史文化館蔵
- ・細井計編1999『奥州道中増補行程記』東洋書院
- ・国土地理院ウェブサイト 地図・空中写真閲覧サービス 1948年5月15日 米軍、1962年10月8日 各空中写真



第7図 「向中野通絵図面」抜粋（もりおか歴史文化館 蔵）

（文献①）安永十年（1791）三月 三ノ十五日 晴

一向中野道明御堤、矢巾通新田御堤、近年殊之外潤申候て水溜り無之、  
 献上御鳥討御用之節、右故御用相立不申候程罷成候、尤潤候上へ  
 水為持候得は御堤端御田地水溢、苜仕潤等二御百姓共甚迷惑仕候段  
 申二付、此儀も難申上候、依之半渡ニ被仰付候得は、  
 水溜り宜御田地へも障不申御献上御用ニ相立可申旨、御鳥見申出候、  
 願之通御御用人中へ申渡之、

（文献②）寛政四年（1792）閏二月 閏二月初日 晴

一 御鳥見共願出候は、預場所向中野村道明御堤、近年殊之外潤候て  
 水溜り無之、御献上御鳥討御用之節御用相立不申候、依渡御普請  
 被仰付候様仕度之旨申出、願之通御御用人中へ申渡之、

（文献③）寛政四年（1792）閏二ノ十五日 晴

一向中野通御代官所之内道明堤、御鳥溜御普請被 仰付候處、  
 五御代官所より人足出働之儀、最早田打時節ニも  
 至甚迷惑仕候間御延被成下度旨、

五御代官所御百姓共願出、御元締・御勘定頭為遠吟味、  
 願之通御勘定頭へ申渡、御御用人中へも右之趣口達ニて為申知之、

（文献④）文化八年（1811）三月 三ノ廿七日 晴

一向中野通中村村御鳥溜道明堤、并仙北野村小鷹堤後御普請之儀、  
 御鳥見申出其筋為遠吟味候處、小鷹堤水門朽損候二付、水門計御  
 取替、道明堤ハ後御普請被 仰付哉、出人足三千七百三拾四人、  
 前例之通五御代官所懸可被 仰付哉と御勘定頭共申出、  
 伺之通申渡御御用人中へ申渡之、

# 報告書抄録

## 報告書抄録

ふりがな	むかいなかのはばいせきはくつちょうさほうこくしよ							
書名	向中野幅遺跡発掘調査報告書							
副書名	第1・2次調査（仮称）盛岡学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書							
編著者名	今松佑太・今野公顕							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館（発行：盛岡市教育委員会）							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話019-635-6600							
発行年月日	2019年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名 (略号)	ふりがな 所在地	コード		北緯・東経		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
向中野幅 (OMH)	岩手県 盛岡市向中野 字幅・字畑返	03201	L E 26-0371	39° 40' 17"	141° 8' 45"	第1次 20170419-20170428	819.0	(仮称)盛岡 学校給食セン ター建設
						第2次 20171101-20171130	743.8	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
向中野幅遺跡 1次(試掘) 2次(本調査)	集落	縄文時代 近世以降		遺物包含層 溝跡		縄文土器・石器 陶磁器片		
要約	<p>本遺跡周辺には、古代から中～近世の遺跡が数多く分布する。これら「盛南地区遺跡群」は、平安時代初頭の延暦22年(803)に、政府が造営した古代城柵「志波城」の南東方に位置する。これまでの発掘調査で、7世紀から10世紀頃まで「志波蝦夷(エミシ)」が拠点とした古代集落群や、中～近世の居館跡、集落跡等が確認されている。</p> <p>向中野幅遺跡は、盛南地区遺跡群の南東端に位置し、古代集落や近世のため池跡(道明堤)があったと考えられている。</p> <p>本調査において、近世のため池跡とされていた湿地帯は、縄文時代以降現代まで、狩場や農地などとして使われてきた場所と考えられる成果が上がった。</p>							

## 向中野幅遺跡発掘調査報告書

### — 第1・2次調査（仮称）盛岡学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書 —

平成31年(2019年)2月28日

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1

TEL019-635-6600 FAX019-635-6605 E-mail iseki@city.morioka.iwate.jp

発行 盛岡市教育委員会

〒020-8532 岩手県盛岡市津志田第14地割37番地2 TEL019-651-4111

印刷 河北印刷株式会社 〒020-0015 岩手県盛岡市本町通2丁目8-7